

バイロンの解説からみるハーン

伊野家 伸一

I

拙稿「ブラウニングを介してみるハーン (1)」においては、ブラウニング (Robert Browning) に関するハーン (Lafcadio Hearn) の英文学における解説を通して、ハーンの如何なる面がうかがえるかについて検討、考察を試みた。

ブラウニングは、「・・・ロマンティックな耽美主義的感情と社会的義務感の相克は、ブラウニングにもはっきりと現れて・・・」(『イギリス文学史序説』 351)、また、1833年の処女作 *Pauline* における「この詩の語り手の病的なほどの自己耽溺の傾向は、ブラウニングのなかにあるロマン主義的体質も如実に物語るものである」(同 351) との見方がされる詩人である。ハーンも、そのエッセイ “The Dream of a Summer Day” において、浦島の話をも夢想しており、彼の妻節子が「日本のお伽話のうちでは『浦島太郎』が一番好きでございました」(「思い出の記」 34) と述べているように、浦島伝説をことのほか好んだ。その浦島伝説には、時の流れが現世と異なる竜宮、そこで至福の時を過ごす浦島、帰郷時に現実の時間経過が襲いかかり、老いさらばえる浦島という「時間的にも空間的にも無限定なものへの憧れ、驚異への愛好」といったロマン主義の特徴(野中 38) が感じられる。よって、ハーンにもロマン主義的な面は認められるところである。

加えて、ハーンが “Studies in Browning” において紹介したブラウニングによる作品は、ロマン主義的要素を含みながらも、“Ivàn Ivànovitch” についての解説に至ると、「教皇」と呼ばれる老人が登場し、その人物が真実を示す様子、真実と正義のために、実定法を超越した「高次の教義 (the higher doctrines)」(168) の存在を強調している。ここには人智を超えた神の意思とでもいふべき存在がみられると同時に、強い倫理観、正義・真実への意識も伝わってくる。そして、こうした解説を行ったハーンもまた、“The Dream of a Summer Day” の後半では、同じように強い倫理観や責任への意識といったものをみせる。同エッセイにて、ハーンは「神を疑い、神との約束を破った浦島を、どうして日本人は憐み、神として奉っているのだろう。西洋では、状況は全く変わってくるはずだ」(18-19) と、お気に入りである浦島について疑問を呈するのである。またこの時、人力車での道中にあるハーンは、車夫から「暑さのため、これ以上走ることができないので、代わりの車に乗ってほしい。車代は約束の額より少なくてよいから」と言われたのに対し、「約束の車代を払おう。私は神が怖いのだ」(27) とも述べる。

このように、ブラウニングの詩に賛辞と共感を強く示したハーンであるが、ハーン自身にも、ブラウニング同様、ロマン主義的な面とともに、強い倫理観や正義・真実の達成が図られるべく、社会的義務感への意識といったものも読み取れるといえよう。そして、キリスト教に懐疑的といわれるハーンであるが、ブラウニングの詩に対する理解と解説、また “The Dream of a Summer Day” の後半に注目するならば、「全能にして絶対的な神への意

識」といったものもうかがわれるかのようでもあり、必ずしもキリスト教に懐疑的と言いつけることは難しいのではないかとの指摘もなしえようか。

このような面が看取されるハーンを考えるとゆくためには、さらにロマン主義という点からの考察が必要かと思われる。そこで、今回においては、ロマン主義を代表するもう一人の詩人バイロン（George Gordon Byron）による幾つかの詩を介してみるハーンを、またそこから抽出できるものを検討してみることにする。

II

それでは、*On Poets* において、ハーンがバイロンをどのように受けとめているかをみることにする。同書では、ハーンは“Byron”と“Culling from Byron”の二章において、バイロンとその詩について解説をおこなっている。前章ではバイロンについて批判的であり、後章ではバイロンの評価されるべき点を紹介している傾向が認められる。ここでは双方の章より、紹介されたバイロンによる詩作とハーンがなす解説を適宜取り上げ、検討してみることにする。

“Byron”においては、まず、バイロンという人物とその背景が紹介されている。そこでは、

People were tired of the coldness and the speculative tendencies of poetry. They wanted passion instead of philosophy; they wanted human characters instead of ghosts. They did not say so, but they felt that way. (542)

として、バイロンが登場する当時の雰囲気記されている。続いて、バイロンという人間とその生涯について概説がなされる。そこには、貴族であったが、放蕩で知られた彼の父親により、幼時苦しい生活を強いられたこと、しかし容貌、才能ともに恵まれたものを有していたこと等が述べられる。バイロンは貴族の娘と結婚するが、その破綻により社交界に背を向けられる。それが彼をして、

He attacked all the conventions, all the hypocrisies, all the moral commonplaces of English society in his poetry; he made heroic crime appear more attractive than cowardly virtue, and he even boldly ridiculed the religious beliefs that excused or sheltered social falsehood. (544)

といった復讐をなさしめたハーンは解説している。そして、バイロンには二面性がみられ「一つは生まれつきの向こう見ず、利己的、官能的な面であり、もう一つは寛大で、英雄的、真に高貴な面」(545)があることも指摘している。

さらに、バイロンがハロー校とケンブリッジに学び、大学在学中に出版した『無為の時』“Hours of Idleness”が、文芸誌 *The Edinburgh Review* による酷評を受けると、『イギリスの詩人とスコットランドの書評家』“English Bards and Scotch Reviewers”を執筆し反論、そ

の後欧州大陸を旅行し『ハロルド卿の巡遊』“Childe Harold”における最初の題材を入手、その作品により評判を得るとともに、幾多の詩作を行ったバイロンについて簡潔な伝記的紹介がなされている（543-546）。ハーンは、*A History of English Literature* においても「バイロンの詩とその体系は、彼の悲劇的な人生を知らなければ理解できない」と述べ、イギリスからの追放という境遇におかれながらも文学的業績は大なるものであったこと、ギリシア独立戦争へ参加した際の指揮官振り等にも触れている（464）。

次いで、バイロンの「短い情熱的な倫を踏み違えた生涯はどんな価値があったのか。その生涯は何を残したのか。英国詩に何をなしたのか」と問う。ここにおいて、ハーンは欧州諸国でバイロンの影響が大であったことを認めつつも、厳しい批判を行っている。即ち、小説であれ詩であれ、優れた作品の創造には「辛抱強い自制力が絶対に必要である」とする立場から、

… there is no escaping the general truth that moral and intellectual self-control go together; for the man who cannot conquer himself in one direction is apt to find it very difficult to control himself in another. Now Byron is a striking example of this truth. The reason that his work is no longer read or valued, except by the young, is that it is nearly all done without patience, without self-control, and therefore without good taste or the true spirit of art. For all art requires the pain of sustained effort; and sustained effort in the highest sense was not possible to Byron. Indeed, towards the end of his life, he bravely confessed that he was not fit to be a poet, and that he had made a mistake in taking up poetry as a profession. (547)

と「自制心と忍耐を欠いたバイロンは詩人に値しない」と断じるのである。バイロンはその才能ゆえに、感情を瞬時に表明することが出来たが、そうした感情、情熱こそ詩であると考えたバイロンの過ちを指摘している。感情の表白というものは、あくまで詩の始まり、根でしかないとハーンはみる（547-548）。

では「なぜ世界はバイロンを賞賛したのか？」とハーンは問いかける。そしてバイロンの“Childe Harold”を取り上げている。ここでのハーンによるコメントは短いものであるが、それをみる前に、まず“Culling from Byron”の章において、ハーンが行っている“Childe Harold”に関する解説をみることにする。そこには、ハーンが同詩において、どこに注目したかが示されている。

「写生家（“descriptive writer”）としてのバイロン」は、スコット（Sir Walter Scott）、ワーズワス（William Wordsworth）にも匹敵するとして、ハーンは、“Childe Harold”の「夜のジュネーブ湖の短い描写」を紹介する。

It is the hush of night, and all between

Thy margin and the mountains, dusk, yet clear,
Mellow'd and mingling, yet distinctly seen,
Save darken'd Jura, whose capt heights appear
Precipitously steep; and drawing near,
There breathes a living fragrance from the shore,
Of flowers yet fresh with childhood; on the ear
Drops the light drip of the suspended oar,
Or chirps the grasshopper one good-night carol more.

* Childe Harold, Canto iii . Stanza 86. (559)

(訳)

静かな夕べ この岸辺と周囲の山々との間には
すべては仄暗けれど 澄み渡り
柔らかに混じり合えど 明らかに見えり、
暮れゆくジュラの山を除いては。
雪を戴くその高き峰々は 峻しく切り立ち見ゆる。
近寄れば 岸辺より花々の芳香
若々しくも新鮮に活々と漂う。
權の雫 軽やかに耳を打つ
蝻いま一度「おやすみ」と歌う。

(*本稿における詩の訳は、恒文社、1989、『ラフカディオ・ハーン著作集第六巻 文学の解釈 I』第九章、第十章(金沢豊訳)より引用)

自然美を謳い上げることを特徴とするロマン派らしい一節である。「この描写は、我々が遠く都会の喧騒を離れて、夏の夜、星明りのもと、広々とした野外で経験することを、何と鮮明に思い出させてくれることか」(559)と、ハーンは述べる。

さらに、同じ“Childe Harold”から、夕暮れ時の美しさを謳ったというその価値だけでも、バイロンの詩は学ぶに値するとして、以下を示す。

The moon is up, and yet it is not night—
Sunset divides the sky with her— a sea
Of glory streams along the Alpine height
Of blue Friuli's mountains; Heaven is free
From clouds, but of all colours seems to be,—
Melted to one vast Iris of the West,—
Where the Day joins the past Eternity;
While, on the other hand, meek Dian's crest
Floats through the azure air—an island of the blest!

* Childe Harold, Canto iv . Stanza 27. (560)

(訳)

月昇りぬ されど夜にはあらず
沈む陽 月と天を分かつ。
眩しき光の海 アルプスの絶頂の如き
碧濃きフリユウリの山々に満つ。
満天 雲の影さえなく 彩り千々に
西の方、巨きな虹 (アイリス) に融け混じりぬ
彼処にて一日は永久の過去と結ぶ
方や 柔和な月の波頭 薄蒼き中空を漂ひぬ
おお至福の孤嶋よ

ハーンはこの連における六行目と七行目に着目する。六行目の「虹 (アイリス)」は虹の女神のギリシア名であり、水平線近くの夕日の色が、最初は目もくらむほどの黄色であるが、次第に橙色や朱色に変わり、「朱色のすぐ上辺りには、あたかも大きな貝殻の内側の美しい仄かな彩りのごとくにきわめて繊細な色合いの黄、淡紅、翠緑に染まっている」様、これがバイロンをして「アイリス」と言わしめた色彩なのだと説明する。さらに、「アイリス」とは、人間の目の虹彩を意味することから、さまざまな彩のおおきな眼は美しい全天空を、その眼の瞳は太陽自体を比喩しているというハーンの解釈も示されている。

七行目については、「西の彼方で一日が全ての永遠の過去へと移り行く」様をみる詩人に、芸術的美しさもさることながら哲学的、瞑想的であるとし、バイロンの最も雄大な詩句のひとつとみている (560-561)。

ここにも、自然美の謳歌、さらに、今みた六行目と七行目には、やはりロマン主義の特徴とされる「時間的にも空間的にも無限定なものへの憧れ」(野中 38) という面がみられ、そうしたなかで、色彩の鮮やかさと詩がイメージさせる色合いの妙を評価しているハーンが認められよう。

しかし、“Byron” の章においては、ハーンは“Childe Harold” について批判的である。ここでは「“Childe Harold” の最初の成功は、一部にはその主題ゆえである。当時においては、旅は困難で費用もかさむものであったため、英国人もスペイン、ポルトガル、ギリシア、トルコといった南欧の国をほとんど知らなかった。イタリアとフランスはかなり知られてはいたが、英国の文人たちはイタリアについては、あまり書かなかった」と述べ、バイロンの成功は、その新奇さゆえのものであるにすぎないとみている。

So the work of the young poet had all the charm of absolute novelty, as well as of certain melancholy beauty which still touches us while reading certain parts of it. A poem of the same kind written fifty years later would have attracted no attention at all. (549)

また、先程みた“Culling from Byron”の章でも、『写生家』としてのバイロン」を述べた箇所において、ハーンは、バイロンが写生文を書けば、スコットやワーズワスに匹敵すると言いつつも「バイロンの詩は、彼らほど完璧ではなかった」(558)としている。

このようにみえてくると、“Childe Harold”に一定の評価を与えながらも、その不十分に厳しい目をむけるハーンがみえてくる。

続いては、ハーンが「読むことを特に勧めたい物語詩が二つある」(568)とする“The Siege of Corinth”と“Mazeppa”に目を向けてみたい。二つの詩は、“Culling from Byron”で引用されている。

まず“The Siege of Corinth”であるが、自ら火薬庫を爆破し、何千もの敵を倒して自分も死ぬというギリシアの勇敢なる都市統治者の話である。ハーンは「幽霊の描写は西欧の詩歌において、それほどありふれたものではないので、こうした面におけるバイロンの能力は、たやすく忘れ去れるものではない」(562)として、詩を引用する。

He gazed, he saw: he knew the face
Of beauty, and the form of grace;
It was Francesca by his side,
The maid who might have been his bride!
...
Her rounded arm show'd white and bare:
And ere yet she made reply,
Once she raised her hand on high;
It was so wan, and transparent of hue,
You might have seen the moon shine through.

* *The Siege of Corinth*, Stanza 20. (563)

(訳)

彼は見たり、凝視めたり。彼はかの美しき貌と
麗しき姿とを認めたり、
そは彼の側に立ちたるフランチェスカ、
己が花嫁になったかも知れぬ乙女！

...

乙女の丸き腕 白く露はなり。
答ふ前に
いま一度 乙女は高く手を挙げぬ。
その手酷く蒼ざめ 色合い透き通る程なれば
輝く月の影さえも 透けて見ゆ。

ハーンは「この描写における第一の長所は、死者の貌に現れた変化を記述した箇所である」(562-563)とみる。そして「場面は夜の戦場、払暁には市を攻めるつもりでいる一軍の将は、婚約者である乙女が幕営に姿を現したことに驚くが、死んだ彼女が霊となっていることを知らない。読み手も、彼女が腕を挙げ、その腕を透かして月光が輝くところで、やっとそれに気付く。この乙女が幽霊であることを、自然にかつ卒然と思い至るように次第に話を進めている」(563-564)と解説を行い、主人公が彼女の正体に気付く場面を引用する。

Upon his hand she laid her own—
Light was the touch, but it thrill'd to the bone,
And shot a chillness to his heart,
Which fix'd him beyond the power to start.
Though slight was that grasp so mortal cold,
He could not loose him from its hold;
But never did clasp of one so dear
Strike on the pulse with such feeling of fear,
As those thin fingers, long and white,
Froze through this blood by their touch that night.

* *The Siege of Corinth*, Stanza 21. (564)

(訳)

乙女は彼の手の上に己が手を重ね—
軽く触れたるその御手は 骨に凍みたる冷たさよ
心臓までも刺し貫く
彼は釘付けされた如く 身動きさえならず。
握る力がかぼそけど いと冷たきこと限りなく
振り解くことさえもえ叶わず。
その夜 長く白き華奢な指触れ
彼の血潮は凍て附く程なれど
かくもいとしき人の握る手なれば
恐怖さえ絶えて打ち震はせることもなし。

このくだりの引用に続けて、ハーンは「彼女は、彼が明朝には死ぬにちがいないと告げ、姿を消す。失せたのではなく、徐々に消え去ったのでもない。ただ存在しなくなったのだ。見回すが、誰もいない。だが、彼は明日の戦いで死ぬことを確信する」(564)と解説を加える。

幽霊(話)を好むハーンであるから、この詩における幽霊の登場とそれによる効果には、かなり賛意、共感を示しているように思われる。死者または靈魂が現れ、何かを告げる、示す話はハーン作品にもみられるところである。“Of a Promise Kept”では、約束の日に義弟に会うため自害し、霊となって義弟の前に現れ、事情を話す武士が描かれている。ま

た“Oshidori”は、雌の鴛鴦が人間の女となって、つれ合いの雄を殺した獵師に、夢の中でその罪を問う話となっている。

次に“Mazeppa”をみることにする。ハーンは、まず詩にみられる物語のプロットを示す。昔、ジョン・カシミア王の近習にマゼッパという少年がいた。その美貌のため貴婦人らから好意を寄せられることもあったようだが、ある伯爵夫人の夫が嫉妬して然るべき証拠があると思ひ込み、マゼッパに対し非道な振る舞いに及ぶ。伯爵は彼を裸にし、野生馬に縛りつけ、引き裂かれてしまうであろうことを期待して、馬を放つ。しかし、馬はマゼッパを乗せたまま、故郷ウクライナのコサック地方をめざす。幾日にもわたる疾走の後、ウクライナに辿り着いた馬は死んでしまう。マゼッパはコサック人に助けられ、その後、コサックの酋長になってゆく。こうしたストーリーとともに、この詩がポーランドの史実に基づいていることも指摘される。(568)

ハーンは「彼（マゼッパ）が伯爵にどのような復讐をしたかは、バイロンが語ってくれようから、私は述べないことにする」(568)として、引用する詩には、次の箇所がみられる。マゼッパが馬の背に縛られ、伯爵家の人間が嘲笑を浴びせるなか、馬が疾駆してゆく場面である。

...

I saw its turrets in a blaze,
Their crackling battlements all cleft,
And the hot lead pour down like rain
From off the scorch' d and blackening roof,
Whose thickness was not vengeance-proof.

...

* *Mazeppa*, Stanza 10. (569)

(訳)

...

我は見つ、炎に包まれし城楼を
音立て狭間胸壁悉く引裂けるを
焼焦げ葺板の鉛 驟雨の如く溶け落つるを。
その厚き鉛板さえ 我が復讐を防ぐこと能はず。

...

ここには、伯爵が自分になした非道な仕打ちに復讐を誓うマゼッパの思いが読める。さらに、疾駆し続ける馬に狼の群れが迫る場面では、次のように描かれている。

...

By night I heard them on the track,

Their troop came hard upon our back,
With their long gallop, which can tire
The hound' s deep hate, and hunter' s fire.

* *Mazeppa*, stanza 12. (570)

(訳)

．．．

夜 跡追い来たる狼どもの声 聞こゆ、
群狼 背後に迫る、
獵犬どもの深き憎しみも 獵師の射撃の腕も
疲弊せる程の持続力ある疾駆の力以て。

ハーンは、「最後の2行は有名である。わずかな言葉で馬の辛抱強さをも同じようによく表現しているからである」と説明する。

そして、ウクライナへ辿り着いた馬は力尽き死んでしまうが、その地で看病されるマゼッパの様子を、ハーンは「恐ろしい騎乗を描いた詩句の慌ただしさや騒々しさの後では、コサックの小屋、彼を看病している娘の様子は穏やかで魅力的である」(570-571)との感想を述べ、詩を引用する。

…

And when the Cossack maid beheld
My heavy eyes at length unseal'd,
She smiled— and I essay'd to speak,
But fail'd— and she approach'd, and made
With lip and finger signs that said,
I must not strive as yet to break
The silence, till my strength should be
Enough to leave my accents free;

…

* *Mazeppa*, Stanza 19

(訳)

．．．

我が重き眼の遂に見開かれるを見るや
コサックの乙女
微笑みぬ—我語らんと試みるに
出来ず—乙女は我に近寄りて
その唇に指立てて
言葉自由に操れる程

我が力の回復せる迄
黙していよと身振りする。

ここまで“Mazeppa”を紹介したハーンは、以下のように締め括る。

It is impossible to deny the name of real poetry to such a composition as this, with its amazingly sudden changes from passion to passion, and from violence to tenderness. After that first lurid outburst of the spirit of vengeance, we have the story of the death-race presented to us in verses that actually ring like the feet of a horse; then what a hush, what softness and sweetness in the scene of the sick room, and the portrait of the girl-nurse! There is no better example of Byron's narrative power than “Mazeppa.” … But, in conclusion, let me remind you again, that Byron is never a careful poet— he always wrote straight out of his heart, without taking the trouble to polish his verses. … (572)

“Mazeppa”の物語性における素晴らしさを認め、評価しながらも、バイロンが周到な詩人ではなかったことを批判している。“Byron”の章においては、“Mazeppa”と先にみた“The Siege of Corinth”について

Pieces like “Mazeppa” and “The Siege of Corinth,” were equally opposed to the moral traditions of English literature; in the first there is a suggestion of justified crime, and in the second the sympathies of the reader are with the man who has denied his faith and his country. (550)

という批判までしているのである。バイロンとその作品に向けられたハーンの目は、評価とともに、周到さ、推敲・検証、道徳性といった面に関しては相当厳しいものとなっているといえよう。

III

それでは、ここまでみてきたバイロンの作品に対する解説において、ハーンのいかなる特質といったものが見受けられるであろうか。本稿の最初にみたごとく、ロマン主義に傾倒するハーンは、ロマン派詩人バイロンの作品について一定の評価を示している。と同時に、「周到さ、推敲・検証が不十分であること」、さらに「道徳性において問題があること」を指摘している。こうしたハーンには、義務・責任・倫理観、即ち‘Duty’への強い意識といった面が認められないであろうか。

ハーンの商品、著述に目を向けるならば、彼の「‘Duty’への意識」が散見されるように思われる。よく知られる“Yuki-Onna” *Kwaidan* では、雪女との約束を守りきることができず、幸福な家庭・夫婦生活を失ってしまう男の姿が描かれている。また、本稿最初に述べたよ

うに、“The Dream of a Summer Day” *Out of the East* では、旅行中立ち寄った旅館の名が “the House of Urashima” (3) であったことから浦島伝説に想いを馳せ、浦島伝説を「四十歳をすぎてもなお、ハーンの心の内深く刻みこまれて息づいている、母と過ごした幼き至福の日々の原風景……」(牧野 145) と恰も重ね合わせているかのようであり、ハーンはそれほどまでに浦島伝説を好んでいたのであろうが、それでも「浦島を可哀想に思うことは、正しいことだろうか」と首をかしげ、玉手箱を開けてしまった点に「約束に背いた浦島」をみている。そして

Things are quite different managed in the West. After disobeying Western gods, we have still to remain alive and to learn the height and the breadth and the depth of superlative sorrow. We are not allowed to die quite comfortably just at the best possible time: much less are we suffered to become after death small gods in our own right. How can we pity the folly of Urashima after he had lived so long alone with visible gods.(19)

と手厳しく浦島への非難がなされている。そこには「神々への違背」を行った浦島をみているハーンがいる。こうしたあたりには、約束を守りきることが出来ない日本人を疑問視するハーンが見えてくるようでもある。

また、ハーンは日本の圧迫感のない穏やかな宗教的な雰囲気を楽しんでいたように思える。“Jizo” *Glimpses of Unfamiliar Japan* における「私が何よりも深い印象を受けたのは、この国の大衆の信仰がいかに楽しげに見受けられたことであった。……自分たちで作りあげた神や仏、それを全く恐れぬ彼らこそは、何と幸福であることか！」(34 - 35) との記述は、その好例であろう。ここには、神を絶対的にして唯一の存在、即ち一神教よりも多神教の醸し出す様子でもいうべきものを好意的に受け止めているハーンがみられるのではなからうか。しかし“The Dream of a Summer Day” の最後にハーンは、75 銭の約束で雇った車夫が暑さのためにこれ以上走るとはできないが、代わりに車屋を見つけてきたのでこれまでの料金として 55 銭欲しいと言ったのに対して、「約束なのだから 75 銭払おう。私は神が怖いのだ」(27) と答えている。そこにはやはり「約束は神の前において厳しく守られるべきであるとするハーンの意識」が認められよう。従ってここではハーンは、全てを見通す全能にして絶対的な神、つまり一神教的な神の存在を意識しているかのようなのである。このあたりは宗教的な意識から、ハーンにおける ‘Duty’ の意識を考える材料ととらえることができようか。

さらに“A Passional Karma” *In Ghostly Japan* では、恋仲となり生涯心変わりをしなないと誓い合ったにもかかわらず、死してなお幽霊になって会いに来るお露を、わが身かわいさから拒もうとする新三郎を、ハーンは「西洋の考えからすれば、……新三郎は卑劣だ」(110) とする。さらに仏教徒であれば来世を信じることができるとは死を恐れる彼は「身勝手というより臆病でさえある」(111) であり、「お露は、彼を絞め殺してもいい」(111) とまで言い切っている。ここには恋情においても、ハーンの「約束は遵守されるべきだ」

という意識が、かなり強く伝わってくるように思える。また“A Passional Karma”においてはお露の女中であるお米について、死後も主人であるお露のために尽くした点を称え、次のように述べている。

To my thinking, the only attractive character in the story is that of O-Yone: type of the old-time loyal and loving servant, – intelligent, shrewd, full of resource, faithful not only unto death, but beyond death… (111)

即ち、ここでは「約束の遵守」という面に加え、お米の「忠節」という点にハーンの意識と賛意が向けられている点がみてとれよう。

また“Bits of Life And Death” *Out of the East* には、染物屋に押し入った盗賊が、その店の老母の「この家の物ならあげることが出来るが、人様の物をあげることは出来ない」(133)という言葉に納得し、その店の預かり物である品には手を出さなかった様子が描かれている。ここには「約束の遵守」・「忠節」とも異なる「職業上の義務」を全うしようとする老母にハーンが目向けられており、また「お前たちが熱心な仏教徒だということは知っている。だから嘘はつかないな。これで全部か」(133)と問いかけた盗賊が、立ち去る際に、正直な態度をとった老母には丁重な挨拶さえしたのに対し、盗賊を追い返そうとして「店にはまだ若い徒弟らがいる」と嘘をついた使用人を殴打した行為(133 – 134)を通しては、店の預かり物には手をつけなかった態度と相俟って、犯罪行為の中にも「正直と責任を尊び、偽りを嫌悪する」、その振る舞いを是認しようとするハーンの眼差しが感じられはしないだろうか。この話の最後を「盗賊たちは誰も捕まっていない」(134)と締めくくっているのも印象的である。

このようにみえてくるとハーンには「約束の遵守」・「忠節」・「職業上の義務」を含む「社会的責務」・「倫理・モラルの保持」といったかなり広い意味での‘Duty’の意識が看取できるように思われる。そしてハーンは一般に日本に対して共感・賛美しているように語られがちであり、実際そうした傾向も確かに見受けられようが、‘Duty’の観点からは上記の“A Passional Karma”や“The Dream of a Summer Day”の浦島伝説の感想にみられるように、日本また日本人を「約束を守りきれない面がある」というある種の疑念に似た心情で以って眺めている面も持ち合わせているとみることもできよう。

以上のように、ハーンには‘Duty’の意識が強く見受けられるが、それは彼が反発を感じつつも身につけていたヴィクトリアニズムの一面ではなかったろうか。彼の養親ブレネン夫人(Mrs. Brenane)は、コット(Jonathan Cott)によれば「典型的なヴィクトリア時代の未亡人」(14)であり、ハーンに「礼儀正しきや品行方正」であることを求めている。その様子は、子供だったハーンが、ギリシャ神話に登場する裸体の神々が載った本に興味を示すと、それらの箇所が削られ、修正されたということからもうかがえる(O. W. Frost 42)。また、コットによると、ハーンもアメリカ時代にアリシア(Alethea Foley)という女性との結婚に際しては、“The bride could not help sensing the groom’s determined attitude

of obligation and duty…” (88-89) という態度であったとされており、その心情としても “In some ways – probably on account of his family history – Lafcadio’s ideas concerning love relationships were quite Victorian; if you had a long-term involvement with woman, you should marry her.” (88) というものであったらしい。ヴィクトリアニズムの時代においては「実現されるべき価値とは、『レスペクタビリティ』といわれるものである… レスペクタブルであるためには… 堅実な生活態度や特性、宗教への敬虔な姿勢なども要求される…」(村岡・川北編著 177) が、そのために「虚栄や偽善もヴィクトリアニズムの一部」(同 179) になっていた。ハーンはその正体といったものも見抜いていたであろうが、同時代の人間としてその影響を被っていた点は否定できないであろう。A *Fantastic Journey* で著者マレー (Paul Murray) はハーンが熊本での生活の不満・苛立ちを吐露しながらも、家族や書生など扶養しなければならない者を慮っている様子を次のように記している。

To American friends he vowed he would leave the country were it not for the nine dependants – his wife, her mother and father, her adopted mother, her father’s father, servants and a Buddhist student – who tied him down. ‘A respectable person’ could not allow such a community to grow up around him and then break it up. The respectable notions of Mrs Brenane’s drawing-room were mingling with filial piety, that reverence for parents and ancestors basic to Oriental society. (156)

ここでは、ヴィクトリアニズムの一面であるとされるレスペクタビリティとハーンの ‘Duty’ についての意識が交錯している様子がみてとれるかと思う。

そして、ハーンのこうした ‘Duty’ への意識や人となりは、彼が嗜好し、また内在させているとも思えるロマン主義、その詩人バイロンに対する視線においても看取されるところのものといえるのではなかろうか。それゆえに、情熱に走り、周到さ・推敲・検証・道徳性さらに自制心・忍耐において欠けるところのあったバイロンに対して批判的な視線を向けたのであろう。そこには、ロマン主義を志向しながらも、それとは対極的な面を示すハーンの姿が浮かび上がってくるように思える。

Works Cited

Cott, Jonathan. *Wandering Ghost*. New York: Alfred A. Knopf, 1991.

Frost, O. W. *Young Hearn*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1958.

Hearn, Lafcadio. *A History of English Literature*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido Press, 1953.

-----, “Of a Promise Kept.” *A Japanese Miscellany*. Tokyo: ICG Muse, Inc., 2001.

-----, “Byron.” *On Poets*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido press, 1941.

-----, “Culling from Byron.” *Ibid*.

- . "Jizo" *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.
- . "A Passional Kama" *In Ghostly Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.
- . "Oshidori" *Kwaidan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1995.
- . "Yuki-Onna" *Ibid*.
- . *On Poetry*. Ed. R. Tanabe, T. Ochiai and I. Nishizaki. Tokyo: The Hokuseido Press, 1973.
- . "Bits of Life and Death" *Out of the East*. Tokyo: Charles E. Tuttle Publishing Co., Inc., 1996.
- . "The Dream of a Summer Day." *Ibid*.
- Murray, Paul. *A Fantastic Journey*. Sandgate: Japan Library, 1993.
- 伊野家伸一 「ブラウニングを介してみるハーン (1)」 *Persica No.39* 岡山英文学会, 2012.
- 小泉節子 「思い出の記」『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』. 小泉節子・小泉一雄. 株式会社恒文社, 1987.
- 斎藤美洲編著 『イギリス文学史序説 社会と文学』 中教出版社, 1981.
- 牧野陽子 『ラフカディオ・ハーン』 中央公論社, 1992.
- 村岡健次・川北稔編著 『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』 ミネルヴァ書房, 1986.
- 野中涼 「ロマン派の創作過程」『イギリス・ロマン派研究—思想・人・作品』. イギリス・ロマン派学会 (代表 岡本昌夫) 編集. 株式会社桐原書店, 1985.